



久遠實成の基督

東京 警醒社書店

020596-000-8

特52-544

久遠実成の基督

平田 平三/著

M42

ABI-0411



259  
452



實成の基督

牧師平田平三述

東京 警醒社書店

明治 42 7 19 内装

THE EVANGELICAL LIBRARY

EDITED BY THE Rev. K. HOSHINO

EVERLASTINGLY MANIFESTED CHRIST.

BY Rev. H. HIRATA.

○宣教開始五十年紀念傳道叢書

- ▲眞の神 山田寅之助君述
- ▲耶蘇の直說法 阿部清藏君述
- ▲神の現在 武本喜代藏君述
- ▲運命と信仰 柏木義圓君述
- ▲久遠實成の基督 平田平三君述
- ▲有情の神 光小太郎君述
- ▲信仰とは何ぞや 大谷 虞君述
- ▲最大の學問 デフォレスト君述
- ▲純正福音 星野光多君述
- ▲神を知るの道 釘宮辰生君述
- ▲完全なる救 露無文治君述
- ▲生命の福音 今井壽道君述
- ▲福音の真髓 有馬純清君述
- ▲信仰の要義 小松武治君述
- ▲最大益事 石坂龜治君述

### ○傳道叢書發行の辭

本年は宣敎事業開始後滿五十年に相當す。於此乎諸敎派は各自部署を定めて傳道運動に従事せり。此時に當りて吾人は明治十七年の頃諸派共同無宗派的傳道をなしたりし往事を回想して欽羨に堪へざるものあり。然れども今日となりては各派既に其歴史と特色とを有す之を打つて一丸となし以て大舉傳道に従事せしめんこと固より二三有志者の力之を能くすべきに非ず。是れ吾人が筆を以て傳道するの方針を立て諸派有志者その勞を分擔して以て茲に本叢書を發行するに至りたる由縁なり。願くは大方の兄弟等が吾人の微衷を諒とし此等書冊を適宜傳道の用に供し同胞を神の國に導くの一助たらしめんことを。

明治四十二年六月一日

傳道叢書編輯者

星野光多

## 久遠實成の基督

横濱日本メソヂスト敎會牧師

平田平三

人が佛に成ることか、神に成ることかいつても、耳慣れた語であるか

ら、別段不審とは思はない。人が神に成ることが出来れば、神の人に

に成ることは、更に不思議なことではないのだが、同じことでも

サテ神が人と成つたといふこと、請取れぬ話になる。所が基督教がそ

れであるので、グラッドストーンも信じてをつたし、ルーズヴェルト

も然ふ信じてをるのである。

(一) 古史の語る應身の神

神が人ご成つたといふことが、信じ難い事であるが。古ひ歴史は皆此事を語つてをつて、これが極めて普通の教理で、人の口吻にも上つてをる事である。山川草木國土禽獸の成佛するを説くのは、佛者の一般に信ずることで、草や木、鳥や獸の有情無情の、差別すらなさまもの、中にも、佛の住み給ふを、疑はぬではないか。バビロン、アツシリヤ、印度、埃及、サテはロマ、ギリシヤの古代史にいたるまで、半神半人の像を傳へ、迦陵嚩伽、天女天人の圖を遺して居るのは、此間の消息を示してをるのである。藤田東湖の常陸帯にも言

つてある如く、我邦純粹の道こそ稱すべきものは、應神帝以前の道であらねばならぬ。其以後には儒も渡つて來、佛も傳つて來、日本人の純思想は、兩者の影響を受けて、複雑なものに化して了つたその甚しく佛などを嫌つて、我邦古代の、純思想を主張する東湖なども、其書いたものを見るに、矢張印度埃及の古代史が語る如くに、顯現した神の消息を語つてをるではないか。有名なその正氣歌に斯様に言つてある。天地正大氣、粹然鍾神州、秀爲不二嶽、發爲萬朶櫻、是れは發句徘徊師の、駄洒瀧とは違ふ。森嚴な口調で極めて、眞面目である。東湖が宇宙の大精神を、富士山の雄壯に認め、櫻花の清婉に感じたのは、素り至當のことである。

敷島の大和心を人とはぐ旭に匂ふ山櫻花

日本人の精神を、遺憾なく、三十一文字に表はした本居翁は、同時に又日本古道の代表的人物であるのだ。その純粋な日本の古道を、代表する人の歌にも、神の姿が鮮かに寫つてをるので、翁は爛漫たる櫻花の中に、神と人との調和を自然に感得したのではないか。山の中にも神が在し、花の中にも神が在してをるのに、山よりも花よりも貴き人の中に、神が在さぬであらふか。人の中に神の在すといふことは果して不審の事であらふか。人もし神の所在を、此所を彼所に探し求めなば、神は終に在らぬであらふ。これ終日尋春不遇春ものである。けれど「道は汝に近く、汝の口にあり、汝の心に在り」で、其實人の中に恒に現して在るのである。

(二) 實成の基督

基督教の目的は、此神を人に闡明にするにある。即ち人の中に在る神とは、基督自身である。基督の弟子にピリポといへる人があつた。曾て基督に向て、「主よ我儕に父(神)を示し給へ」と願ふた。その時基督は「ピリポ我かく久しく、爾等と偕に在りしに、未だわれを識らざるか、我を見しものは父を見しなり、何ぞ父をわれに、示せといふや」と答へられた。ピリポは所謂、終日春を尋ねて、春に遇はざる愚を學んだものであるが、基督の答に依て、基督と父(即ち神)との一つなることが、了解せらるゝ。

神といつても、基督といつても、基督教では其關係が同一であるのであるから、基督は過去久遠の昔より、盡未來の後にいたるまで存することを説くのである。基督教の倫理觀とか、世界觀とかいふものは、今日既に世間に了解せられて、人の腑に落ちた様に思われるが、久遠の基督にいたりては、教理以上の教理で、基督教の第一義であるといつても好いのである。基督が久遠實成の神なる故に、基督を信じて、活ける信仰も生じ、安心も出來上がるのである。斯は決して信じ難き話ではない。法華經に斯様に言つてある。「我釋氏の宮を出て、伽耶城を去り、遠からずして菩提を得たり、然も我は實成佛、甚大久遠なり」と。釋氏の王宮に人となりたる悉多是、吾々

と同じく體軀を俱有したる凡夫なれども、成道したる釋迦牟尼は、久遠實成の性を俱へたる法の體であるといふのである。その法の體こそ、過去永劫の昔より、盡未來の後までも存するのである。猶太の國に生れたる、ナザレの耶穌は、匠工の家に人と成り、血肉の上よりすれば、ダビデの子孫に相違なければども、復活したる靈性の基督は、即ち久遠實成にして、過去十方の世界より、未來永劫の後を通じて存するのである。

基督の弟子ヨハンは、その主の法身に付き、遺憾なく言明してをる。「太初に道あり、道は神と偕に在り、道は即ち神なり、この道太初に、神と偕に在りき、……之に生あり、この生は人の光なり」とい

つてをる。道は基督を指したので、基督は神に偕に在る斗りてなく、彼は即ち神だといつてある。生のある光といふも、亦基督を稱るので、又續ひて「すべての人を照らす眞の光は、世に來れり……それ道肉體となりて、我儕の間に寄れり」こもいつてをる。即ち光なる基督の世に生れたるは、神の顯現したのである。既に基督の靈性、久遠實成であれば、其動作は無碍なる故に、生、死、復活、昇天、少しも障碍あるべき筈なく、何事も自由自在なるべきは、當然の事である。

維摩經に斯様な話が出てをる。世尊が疾に罹りし爲め、阿難といふ弟子が鉢を携へて、大波羅門家に往いて、牛乳を乞ふた。スルト

維摩大士が通り掛つて、阿難に晨朝此所に来つて何を爲てをるのかと問ふた。阿難は世尊病氣の爲めに、牛乳を乞ふに參つたと答ふる。維摩は其は可笑な事ではないか。如來の身は金剛の體ではないが、諸惡已に斷して、衆善盡く會してをる、何ふして病氣などいふものがあるかと問ひ詰めた。阿難がセツバ詰つて答ふる。この出來ぬ時、空中に聲ありて言ふ、阿難よ居士の言の通りである。但佛が五濁惡世に出づるが爲めに、斯の法を現したのだといふにあつた。

三 應身に關する異同

神の人の中に現れ給ふた理合は、佛も充分に説いてをる。但だ佛では神といはずして、佛といふのである。然れば基督教で言ふ如く、

神が基督に於て顯はるゝ通りに、佛が世に現してをるのかといふに、其所に相違の點があるのだ。眞如の法の體は、久遠實成に相違なけれども、その法を悟るものが佛に成るので、法といへる實の體は、佛でもなく、また神でもなく、勿論人でもないのである。夫は何ものだといふなれば、墨繪に畫ける松風の如く、音もなく、香もないのである。勿論生があるとか、人格があるとかいふ様な次第のものではない。その理合は基督の人となりて現し給へる事に似てをつて、その實は洪大なる理想を示したに過ぎないのである。しかし是れは人間終局の祈求であるかも知れぬ。所が佛の理想とする所と、人間終局の祈求とする所とが、基督教に於ては實際の事實であるので、

それが實際の事實であるから、信仰に活ける生命が生じて來るので、其安心も一時の安心でなく、終世の平和に變るのである。

(四) 他力回向の信心

其所になれば、淨土眞宗の方は好く説ひてあつて、常識に富んでをると言はねばならぬ。眞如だの、見性だのといふと、眞理は眞理でも、人に遠い眞理で容易に、心裡に入り悪い。他力回向の信心を以て、彌陀如來の本願に頼むものは、假令十方三世の諸佛に捨てられたものでも、見棄てずして助けまいらすといふ方は、人情に寫て人間實際の狀態に、適合した眞理である。元來また无上殊勝の悲願を俱へ給ふ佛といふものがあるなれば、身を五濁の世界に現してま



でも衆生安堵の途を計るは、止むを得ざるごとくなるべく、慈覺、曇鸞、親鸞等は、皆此佛の現身或は化身にて、かゝる具體の眞理に接したればこそ、衆生も難有さ身に徹して、安樂淨土の往生を遂ぐるごごが出来るのであらふ。即ち久遠實成の眞理が、體ご成りて顯われたので、曇鸞も親鸞も渾な如來の現したのであるから、彌陀に頼む程の人は、たごへ十惡五逆の罪人でも、五障三從の女人でも、恰ご玄冬素雪の寒氣身に浸みて、寒いご思ふ様に、或は九夏三伏の苦熱身に答へて、暑いご感ずる通りに、他力生因の大本願に信賴せねばならぬ様になつて來るのである。

淨土眞宗が、如來の本願を説き、他力回向の信心を唱ふるは、人情に慍ひ、一番人間に近き眞理に相違なけれごも、西方に置ける彌陀一佛も、矢張理想の彌陀で、現實の彌陀でないから、信仰上の權威や、活氣の上に乏しひ所がある。

(五) 天親等の見識と基督の救

天親や龍樹等の諸菩薩が、淨土の門を闡かれて、他力往生の道を示されたのは、此上もない見識だご思ふ。「橋は流て水は流れぬ」の「啼かぬ鳥の聲」だごいつてをる中に、無常にして迅速な死ごいふ風は一瞬間に七八人も、此世から吹き去つて了ふのであるから、高尚は高尚でも、最ご必要な活きた問題に移らねばならぬのである。而して實地の問題になつて來るご、自力往生の中々容易の事でない

ここが解かて来るのである、予は此問題に就いて、事に堪ゆる自力の程度、心の傾向なご親しく経験したことがある。

五六年以前の事であるが、人を介して瀕死の病者を訪ふたことがある。此人は醫者であつて或治療法を發明までしたところのある人で、世間には名の知られてをる人であつた、齢も古稀に近き老人であつて、儒佛の素養もある人だが、永く胃癌を患ふて、命旦夕に迫つてをる。本人の希望は、基督教の牧師に逢ふて、臨終の慰安を得たいといふにあつた。

予は病者の枕頭に臨んで、既に重態に陥入つてをるのを見て取つた。病者の夫人は、耳に口を寄せて、基督教の牧師サンが参られましたと告げた。病者は重き頭を僅に擡げ、水を口に浸して言ふに、私は今より四拾年以前に、漢譯の聖書を讀だところがありました。其後基督教の信者に接して、斯の教を耳にせんでもありません。幸に先妻は信者であつて、其葬式もキリスト教でいたしました。が、私は是迄非業なことを作たもので、今日迄此教を信するところが出来ませんでした。今にいたりて佛教に頼りて救はるゝとは思ひません。此場合に臨んでも、神を信じて安心することは、出来るでありませんしようか。

こいふのである。何たる沈痛の語であらふ。此文けを言ひ切るに、幾回が氣息を休め、口を濕ふし、苦痛を忍んで言ふたのである。予

も聞き終るに忍びなかつた。彼は自力全く盡きて、他力回向の信心を發したのではないか。

天親、龍樹等の達人が、人間の自然に辿らずに居れぬ徑路に思ひ當つたのであるが、其自然に辿らずにをれぬ徑路こそ、基督教に於て現に事實となつて開けてをるのである。

(六) 基督教の基督

基督教の神は、眞如などいふ様に、法相の理體を指すのでなく、人格を俱有て現に實在する神を言ふのである。又基督は無量不可思議の壽命を有つといつても、其は但だ理想の假體を言つたのでなく、過去久遠の昔、神と偕に在りし身の此世に現し給ふた事實を言つた

のである。これは基督教の大主眼である。基督は神を世に顯はすに在つただけれども、實は顯はしたのではない、現はれたのだ。釋尊と雖ども、無上の道を説いたので、釋迦自身を説いたのではない、孔夫子といへども、先王の道を祖述られたので、孔子自身を述べたのではない。けれども基督にいたりては、基督自身を説かれたのである。保羅といふ弟子も基督教の「奧義は即ちキリストなり」といつてをる。即ち基督の人間の中に現はれたのは、生活を以て神を顯はしたので、人間を神に立歸へらしむるには、之れ以上の好い道はまたとあるまいと思ふ。

(七) 久遠實成の基督と其威嚴

人の悪より善に遷つるのには、本心に親しく教の威厳を感じねばならぬ。知らずして罪を犯すものは、甚だ少く、識つて罪を重ねるものは、極めて多い。人の教に歸依することの出来ぬのは、決して歸依する丈けの理由が乏しひからではない。心根が横着で、心術が劣等であるからなのだ。智者でも學者でも同じ事である。世の人類全體を此部類中に容れて差支はない。かゝる次第であるから、幽玄なる哲理でも、高遠なる教訓でも、効を奏さずに、罪惡は洪水の如くに、世に汎濫してをるのである。けれども道は壯嚴な姿を以て吾人の目前に嚴立して居ることすれば、人は自然に其威稜に照らされて、畏敬せず居ることが出来ぬ。洗禮のヨハネは道の化身なる基督に

接して、眞理の威嚴と恩寵とに照らされて、衷必畏服して了ふた。彼ヨハネが當時の人々に説く所を見てもよく解る、「今や斧は樹の根に置かる」と叫んだ。神の審判が、恰も鐵輪の頂上に轉ずるが如くに、悪人の頭上に臨んでをることを感じた。「彼は(基督)聖靈と火を以て、爾等にバプテスマを授けん」といつてをる。聖靈といひ、火といひ、如何に壯烈で、又森嚴な語であらふ。陳腐なる古人の教訓や、道學先生の講義の類ではない。先導の光焰は實物より發射するのであるから、本心に道の威嚴を感受し様とすれば、久遠實成の基督に接するより外に道はないのである。

## (八) 久遠實成の基督と其聖化

宗教の目的は、人を救ふにあるのだから、教ゆるよりも、化するにあるのだ。譬へば川魚を取りて、井水に入れ置けば、暫時は原色でをつても、數時間の後には、その色井水の色と見解の付かぬ程に變りて了ふ。之は教へられたり、學んだりしたのでなく、化して了ふたのだ。人は教へられたり、學んだりするけれど、教に化されなければならぬのだ。恰度虫が木の葉に棲で、葉の色と同じ色を保ちてをる様に、人も教の中に棲で居ねばならぬのだ。甚大久遠の基督が、人間の中に生活した重なる理由は是である。言はゞ人間の世界を大なる家庭として、基督はその主人となられたのだ。基督は神

を父と稱へられて、吾々人間を神の子とも呼び、兄弟とも稱へられた。神と人との間柄は、父子の関係で、家族の親交であるから、聖化とか、同化とか、或は教化とかいふ事が全く成就せらるゝのである。聖化などいふ語は、信仰上から言へば此上もない貴ひ語であるけれど、實は漠とした捉へ所の極まらぬ語であるが、斯る家族の関係より見れば、明かに解決の付てをる事柄である。譬へば兒女が自然に父母の爲す所に、感化せらるゝのは、父母に教へらるゝのでなく、其生活の状態に化せらるゝのだ。基督に接するものが、自然に其感化を受くるのも、基督の生活の上より受くる感化であるから、基督に肖る様になる、「汝等はイエスキリストの裏に造られたる

もの「ご聖書に言へるのは、當に此事を言ふのである。左はいへ基督は昔にのみ現はれ給ふたごいふのでない、久遠實成に在りして、今も吾々と偕に生活してをるから、吾々は絶へず其感化を受くることが出来るのである。

(九) 久遠實成の基督ご其贖罪

基督自ら世に現し給へるにより、其誓ひ給へる救に、超絶無上の價値が存するのである。大使徒保羅はローマ人に送りし書簡の中に、「只基督耶穌の贖に頼て、神の恩を受け、功なくて義とせらるゝなり、神は其血によりて耶穌を立て、信するものゝ、挽回の祭物ご爲給へり」(羅三〇二四、五、六)と言つてをる。假令十方の薩埵でも、東西の

聖人君子でも、古今の仁人義士でも、基督のこの大悲願には及ぶべくもないのである。

古人の垂れたる教訓、佛菩薩の説きたる法門、義人仁者の行狀等は、渾な吾々を教育したり、獎勵したりして、善道に導き、善行を立てしむるものであるけれども、吾々の靈魂を罪より救ふものではない。是點よりすれば基督の教訓ご雖も、教訓が人を救ふのではない。是等は月を指した指であつて、月ではない、救を指したものであつて、救其ものではない。

仁人義士の死の中には、人を動かすもの尠くない。同じ死の中でも人の爲めに生命を棄つることなれば、献身犠牲の精神を含んでをる

のであるから、實に貴ひのである。仁人義士の身を捨るのは、多く此誠意に基いてをるから、人を動かすのである。

一死誠心爲萬人、慘刑何憶及家倫、休言義俠空遺戮、菩薩元來誓捨身

是れは宗吾の像に題したものであるが、如何にも悲壯で、十字架上の基督に題したものと好い程である。然し献身犠牲の死でも、國の爲めであつたり、義の爲めであつたり、或は道の爲めであつたりして、約り眞理の爲めに死ぬのであるから、縦んば希有の死であつても、人間たるものゝ盡くすべき當然の義務だと言つても差支のないのである。基督の死は死中の聖なるものに、相違ないけれ

ごも、單に死といふ事よりすれば同じく、献身犠牲の死であつて、死は即ち死であるから、其死自身が救であるのではない。基督の死は救の本願を遂ぐるが爲めに撰まれた方便の一であるから、其意にて基督の死を信すれば、十字架の鮮血は、吾々の罪を滌ふの價であるのである。

其救の本願とは何を言ふのであるか、既に教訓でない。既に法門でない。既に行狀でない。既に死でない。即ち保羅の言の如く、一只基督耶穌の贖に頼りて、神の恩を受け、功なくて義とせらるゝのである。基督の大悲願がこれに外ならぬのである。元來吾々には恩籠によりて、赦罪を得るより外に、責任の上には餘地がないのである。

吾々の罪惡と呼ぶものは、煩惱とか、妄念とかいふ様な、漠然たる意味合のものではなく、神に對して鮮かに犯したものであるから、相當なる神の所置なしに、責任の消滅するものでないことは明かなことである。佛者も罪業の盡滅せざる間は、六道を輪回すると言つてをるが、此間の消息を説いたもの云ふべきだ。あかし一方に罪といふものゝ勢力が、如何程強ひものであるかを思はねばならぬ。釋迦は希有の大智者で六年間（一説に十二年）罪と戦つて、僅かに解脱の道を得た。達磨は蓋世の豪の者で、尙ほ九年の永の月日罪と闘つた。同時に罪に對する人間の力の程度も、是れで試めざるゝてはないか。人は懺悔すれば好いといふけれども、懺悔に何の功德があるか。始めから人には罪を犯す權理はないのではないか。縱んば懺悔したにしても、懺悔すべきが當然のことであるのだから、懺悔は救を買ふの價あるものではない。

罪の勢力はご恐るべきものはない。近代のクリミノロヂー即ち犯罪學は罪惡を病氣だごまで論じてをる。其程罪惡の勢力が強くて、壓迫力があるのに、之に對抗する人間の能力は、大概程度がある。釋迦、達磨の如き非凡の人達でも、九年十年の月日を費して、僅に解脱したごならば、人類の九分九厘までは、罪に克てないご見ても大差はない。其上に懺悔したごて其れが價値でないならば、神に對する罪の責任は如何にして消滅するのであるか。結果は言ふまでもな



い明了である。即ち刑罰なしに責任を免れんとすれば、贖の道より  
 外に道はない。基督の大悲願が是に超發して贖となつたのである。  
 譬へば兵士が戰場に於て、敵と相見る場合には劍戟を以て相争ふ  
 のであるが、一旦敵を仆すや、直に進んで其疵を裏んでやるではな  
 いか。角觥が其敵を打倒して、起つ能はぬを見るや、自らの手を以  
 て敵を援け起こしてやるではないか。人間同士の間ですら、情の至  
 つたときには贖の意味が顯るゝのである。路加傳といふ本の中に放  
 蕩兒の改悔した話がある。一旦改悛した蕩兒が、進まぬ足を鼓して  
 故郷さして、歸るには歸へつて來たか、戀しき我家を見ながらも入  
 ることが出来ない。鬼やせん角やせましと思ふ中に、老の眊める眼  
 にも、遙かに我兒を認めたる父は、我より進み走りて携れ歸へつた  
 ではないか。況してや、無上殊勝の大慈愛を俱へ給ふ父の神は、何  
 ぞて贖の道を開かずをらるべき。  
 世の人よ、罪業に對して懺悔するのみでは足りませぬ。神に對し  
 て悔改めよ。サラバ久遠實成の基督は無上の恩寵を垂れて、御身等  
 を救ひ給ふは明かである、確である。

久遠實成の基督終

明治四十二年七月十四日印刷  
明治四十二年七月十五日發行

不許  
復製

述者 平田平三

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 福永文之助

印刷者 橫濱市大田町五丁目八十七番地 村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警醒社書店

印刷所 橫濱市山下町八十一番地 福音印刷合資會社

電話新橋一五八七  
振替貯金口座五三番



方寸之內  
自有乾坤